三

源水が何百もあるというだけに、由布院岳本の下ん湯は滔々とした湯を湛えていた。暮色の忍び寄る湯船には松明が燈され、鄙びた旅情を掻き立てた。

「どちらからの湯治にございますか」

湯煙の中から声がかかった。

百姓か、老人が声をかけてきた。

「近くを通りかかりましたでな、由布院の湯にと思い、立ち寄ったのです。関前から参りました」

磐音はこう告げた。

「それは遠路はるばるでございましたな」

「そなたはよう見えられるのか」

「秋を前に骨休めにございますよ。毎年、１０日ほど寄せてもらいます」

人品から見て、近在の名主か庄屋であろうか。

「こちらの湯には、方々から湯治に来られるようですね」

「噂を訊いて、九州一円からこんな山奥まで湯治に来られます」

「川向うで湯治とは思えぬ浪人者も見かけました」

磐音は偽りを言い、訊いてみた。

「ああ、あれにございますか。とある商人が若い妾に用心棒まで引き連れて、湯元屋に滞在しているのですよ。浪人どもは退屈とみえて、酒を飲んでは騒ぎを繰り返す。湯元屋でもほとほと困っておるようですがねえ」

老人が声を潜めて言った。

「それはまたどちらのお大尽ですか」

「お侍様と同じ関前の西国屋次太夫様ですよ」

「おおっ、西国屋の主どのの一行か」

「ご存じで」

「それがしのような下士には口も利いてもらえぬでな、面識はござらん」

「それはようございました。俗塵を離れた山里の湯に来るのに妾を伴い、さらに無粋な浪人連れとは、西国屋の所業が知れます」

老人はにべもなく吐き捨てた。

「おお、これはつまらぬことを話しましたな。お先に失礼しますよ」

老人が上がっていくと、広い湯は磐音一人になった。

松明の明かりが力を増して、湯に照り映えた。

（奈緒、どこにおる）

恋しい女の顔が頭裏に蘇った。

まず関前藩の禍根を取り除いた後に奈緒の行方を探す、それがこの二日、山道を歩きながら決心したことだ。

（待っていてくれ、奈緒）

人の気配がした。

「戻って参りました」

仁助が湯船のそばに来て桶で湯を何杯もかぶり、旅の汗を流すと湯に入ってきた。

「湯元屋では西国屋の一行を持て余しています」

「毎晩、浪人どもが酒に酔って悪さをするようだな。湯治の老人に聞いたが」

「里の女が何人もいたずらをされたようで、土地の若い衆が浪人を襲うというのを古老たちが引き止めるのに必死だそうです。そのうち、血を見ることになるのではと、どなたも心配しておられます」

「姫村理三郎は、今夜も、宇佐から湯治に来ているという女のところに出掛けるか」

「それが年増女のところで今も酒盛りをしていますよ」

仁助が苦笑いした。

「今晩は泊まりと見ました」

「お盛んなことだな」

「女が滞在する百姓屋は、湯元屋から三丁と離れていません。前が畑で三方を竹藪に囲まれた豪農の離れでしてね。煮炊きは連れてきた小女がしているようです」

仁助は姫村がいるという百姓家を見てきた様子だった。

「ひと眠りしたら、姫村理三郎どののご機嫌を伺いに行きますか」

「ならば、湯から上がって飯が先だ」

仁助は、足が早いばかりではない。すべての動きに無駄がなく早い。

万事にのんびりの磐音をびっくりさせた。

が、江戸からの旅の間に互いの呼吸が飲み込めると、性急とのんびりはなんとなく歯車が噛み合っていた。

磐音が湯から上がったときには、仁助はすでに旅籠から借り受けてきたという洗いざらしの浴衣に袖を通していた。

「坂崎様にもございます」

脱衣場の籠に浴衣と帯が用意されていた。

磐音たちは囲炉裏のある板の間に行った。

由布院は標高四千八百余尺の由布岳の南西麓に広がり、周囲を山に囲まれて狭霧が立つ地として知られていた。それだけに囲炉裏は欠かせなかった。

湯治客の大半は自炊だ。

囲炉裏端に用意されていたのは、二つの膳だけだ。

猪肉と野菜の炊合せ、岩魚の塩焼き、具だくさんの汁、漬物が大丼に盛られていた。

「酒は焼酎ですがお口にあいますか」

「仁助、それがしは関前生まれ、焼酎の香りを嗅いで育った口だ」

磐音が酒の味を知ったのは江戸に出た後のことだ。

二人は焼酎を二合ほど分け合って飲んで陶然とした。

自炊の食事を終えた客たちが、囲炉裏の周りに茶菓子などを持ち寄ってきた。

「またお会いしましたな」

下ん湯で会った老人の顔もあった。

磐音たちは早々に食事を終えると、部屋に引き上げた。

「少しばかり仮眠をいたそうか」

磐音と仁助は板の間に夜具を敷き延べるとすぐに鼾を掻き始めた。

磐音と仁助は夜明け前の土橋をすたすたと渡った。三刻余り熟睡したせいで、二人の体力はすっかり回復していた。

仁助は前夜歩いているだけに、暗闇でも足の運びに淀みがなかった。

「坂崎様、あの百姓家にございますよ。離れは竹藪に囲まれて見えませんが」

そう言った仁助は、

「ここらでお待ち下さい。離れの様子を見て参ります」

仁助がそっと磐音の前から姿を消した。

中居半蔵が、

「仁助は忍びの真似ごともしおるぞ」

と感心した身のこなしで竹藪に溶け込んでいった。

磐音は、朝がゆるゆると開けてくる光景を眺めていた。

盆地の湯の里に朝霧が漂い、この世とも思えない世界を浮かび上がらせていた。

「坂崎様、いい塩梅にございました。姫村はさすがに一晩主のもとを空けたことが気になるのか帰り仕度をしております。すぐにもこちらに姿を見せます」

霧をそよとも動かさずに磐音のもとに戻ってきた仁助が報告した。

「どこか待ち受ける場所はあるかな」

「湯元屋への戻り道、竹藪の中を一丁余り通ることになります。そちらで待ち受けるというのはいかがですか」

「そなたに任せる」

二人は霧を蹴散らして竹藪の道に先行した。

姫村理三郎が二人の待ち受ける竹藪に差しかかったのはまもなくのことだ。

背丈はさほど高くはなかった。が、がっちりとした体付きで腰がどっしりと安定していた。年の頃は三十三、四か。剣術家として一番脂が乗り切った年齢であった。

竹藪の地表から一、二尺のところを霧が這っていた。

姫村理三郎の足が止まった。

磐音が行く手を塞ぐように立っていたからだ。

白み始めた朝の光に磐音の様子を見ていたが、

「何者じゃ」

と誰何した。

「元豊後関前藩家臣坂崎磐音」

「坂崎……蟄居閉門を申しつけられておる坂崎の縁戚か」

姫村は関前のことをよく知らないのか、訊いた。

磐音はその問いに沈黙したままだ。

「何用あって、おれを待ち受けた」

「そなたには格別用はない、西国屋次太夫どのに用があってな」

「それで用心棒のおれを始末するというのか」

「由布院から立ち去ってもらいたいとお願いしても駄目でしょう」

「ふざけたことを」

姫村理三郎が剣を抜いた。

構えた一分の隙もない。小遣い銭稼ぎの用心棒の腕前には勿体ないほどだ。

「関前藩の家臣なら、神伝一刀流の中戸信継の弟子か」

「さよう」

「田舎剣法じゃな」

と姫村は蔑んで言った。

「お手前の流儀はなんでございますな」

「愛洲移香斎直伝の新陰流だ」

姫村は嘘か真実か、胸を張った。

剣は脇構えにつけた。

磐音は備前包平二尺七寸を正眼に置いた。

峰に返す余裕はない。

姫村が剣を抜いたときから死闘になると覚悟した。

竹藪の真ん中に踏み固められただけの、幅一間ほどの道。

二人は間合い四間で対峙していた。

風が吹き来て、足元の霧を乱した。

竹の幹にあたった霧が立ち上って二人の視界を妨げた。

「おおおっ！」

姫村理三郎が霧を蹴散らして突進してくると、脇構えの剣を伸びやかに回転させた。

磐音も踏み込みながら、車輪に走る剣を正眼の剣で叩いた。

流れた姫村の剣が直径三寸ほどの竹を両断して倒した。

また霧が舞い上がった。

姫村はすぐに態勢を立て直すと、剣を磐音の右肩口に移行させ、襲った。

流れるような剣捌きで、遅滞がない。

磐音はそれも弾き返した。

居眠り磐音の受けの剣が姫村の攻撃を読みきって丹念に防戦した。だが、攻撃に転じる気配はない。いや、姫村の攻撃が俊速で付け入る隙がなかった。磐音は細心の注意を払いつつ、受け、払い続けた。

焦れたのは攻め続ける姫村理三郎のほうだ。

「おのれ、のらりくらいりと躱しおって！」

怒号した姫村が上段からの袈裟討ちを連続して見舞ってきた。

磐音は激しい連続技を躱しながら後退していった。

「それっ！」

一段と高く振り被った姫村の攻撃と攻撃の合間に綻びが生じていた。だが、攻撃に熱中する余り、そのことに気が付かなかった。

「死ねっ！」

口を大きく開いた姫村が上段に豪剣を振り戻した。そこから雪崩れるような、懸河の勢いで剣が襲い来る。

その一瞬の隙を磐音は見逃さなかった。

防御一辺倒に使われていた包平が脇に落ちて、車輪に回された。

振り下ろされる剣と胴撃ちが同時に仕掛けられた。

が、磐音が踏み込んだ分、包平が姫村理三郎の胴を深々と両断して、磐音はその勢いで竹藪に走り込んでいた。

背中で、

どさり！

と音がした。

振り返った磐音の目に霧を見だして姫村が倒れ伏すのが見えた。

「ふううっ」

磐音が息をひとつついて包平の血振りをした。

「坂崎様、お見事にございました」

早足の仁助がそい言うと姫村の死を確かめていたが、

「この者の死体、どういたしますか」

と訊いた。

「どこぞに山犬などが食い荒らさぬ場所はないものか」

「竹藪の向こうに古井戸がございますが」

仁助はそのことまで計算に入れてこの場所を戦いの地に選んでいた。

「よかろう」

二人は姫村の手足を抱えて古井戸まで運び、磐音が懐から懐中物と脇差を抜くと死体を投げ落とした。

「仁助、この二つのものを村の子供に託して湯元屋の次太夫に届けてくれ。様子を見ようではないか」

「畏まりました」

仁助が嬉しそうに笑うと、

「坂崎様、朝湯に浸かりながら待っててくださいませ」

と言うと霧の中に姿を没していた。

岳本の共同湯、下ん湯に行くと昨夕の老人がいた。

「朝早くからお出かけでしたか」

「由布院は始めてにございます。あちらこちらと見物に廻っておりました。供のものとも相談し、もうしばらく滞在いたそうかと考え直しました」

「それは良い考え、わざわざ山奥まで立ち寄られて一泊は少ない。せめて四、五日は湯に浸からねば効能が出ませぬ」

磐音は朝早くから闘争に及んだ神経の高ぶりと、姫村理三郎の血の臭いを洗い流すように五体を湯につけた。

日出から湯治に来たという隠居の繁平と四方山話をして、長湯をした。が、仁助が戻ってくる気配はない。

湯治宿に戻って一人先に朝餉を食した。

「主どの、すまぬが今しばらく膳は残しておいてくれ」

と言い置いて部屋に戻った。

仁助が豊後屋に戻ってきたのは、四つを廻った刻限だ。

「次太夫のところは釜の湯をひっくり返したような騒ぎです。姫村の仲間たちが女の所に走り、百姓家と湯元屋の間を何度も往復して探していましたが、先ほど戦いの場を探し当てました。

死体はむろん発見されていないという。

「次太夫はなんぞ動きを見せたか」

「湯元屋で働く下女を金で口説いて聞き耳を立てさせたところによると、しばらく様子を見ようということになったようです。浪人たちは由布院の旅籠を虱潰しにして怪しい者はいないか探せと命じられました。早晩、ここにも来ます」

「ならばお待ち申そうかな」

と答えた磐音は、

「仁助、飯を食べてくれ」

と言った。

豊後屋に姫村理三郎の仲間が顔を見せたのは、板の間で磐音と仁助が昼飯代わりに蕎麦を食っている時だった。

土間に立った四人は、

「関前から来た坂崎とはそのほうか」

と小柄な男が磐音を睨んだ。帳場で訊いてきたようだ。

「中老の坂崎と関わりの者か」

小柄な浪人が板の間に土足で上がってきた。

「そなた、姫村理三郎どのをどうしたな」

「愛洲移香斎様直伝の新陰流の姫村どのか」

「やはりこやつが姫村どのの行方に関わっておるぞ！」

大兵肥満の巨漢が叫んで、抜刀する小柄な仲間の傍らに飛び上がってきた。

「姫村理三郎どのは今ごろ三途の川を渡られているであろう。そなたらも後を追われるか」

磐音が土足の二人をじろりと見た。

「おのれ！」

「そなたらの任務は西国屋次太夫の護衛ではないのか。戻って次太夫どのにご相談申し上げたほうがよいと思うがな」

磐音の言葉に巨漢が剣を振り上げた。

「待て！」

と制止したのは小柄な浪人だ。

「こやつ、なんぞ魂胆があってわれらを挑発しておる。それなれば、逃げも隠れもすまい。まずは西国屋どのと相談だ」

板の間から身軽に飛び降りた。

巨漢もしぶしぶ後退して土間に降りた。

「このままで済むと思うな」

小柄の剣客が言い、姿を消した。

磐音のかたわらの早足の仁助が立ち上がり、後を追っていった。